

高等学校社会科『倫理・社会』の変遷について

三 上 登

一、はじめに

高等学校社会科目いや全高校教育科目の中で、『倫理・社会』ほど、世間を騒々しくして現われた科目はない。突然、社会科の中央に飛び出て、わずか二十年の歴史と共に、今、高校教育から形はどうあれ実質的な意味で遠ざけられようとしている。これまでの約二十年間をふり返りながら、一体この科目の存在とその意義は何であったのか考えてみたい。この事は、高等学校教育の本来性、基本姿勢を考える上でも重要であると思われるからである。高等学校指導要領の改訂は、常に社会科目がその的とされてきた観があるが、『倫理・社会』はその中心の一つであったように思われる。騒がれて登場し、今、消えるように舞台の中心から静かに去ろうとしている。誰からも問い直されることもなく忘れ去られるようにである。様々な不安と期待を託されながら、そして多くの教育現場での地味な努力と経験の積み重ねによって、漸く社会科目として定着しつつある時である。その理由の主なものは、この社会科目の成立過程において

広く社会的な合意を得ていなかった事とこの科目への期待の取り方の違いにあったように思われる。その一つは、この科目の存在の意義を、学習者自身の内面的人間性の探究と思索する力を養うことに中心をおく立場と、今一つはすぐ役立つ日常生活の規範あるいは伝統的な思考行動の教育としてとらえる立場との違いである。

今、全体の流れとその意味や位置付けを充分に考察するには、あまりにも資料が不足であり、時間的にも限られているので、極めて形式的な通達や答申、指導要領とその解説及び教育現場の状況をもとにしながら考えてみたい。

二、社会科目『倫理・社会』の成立 ― その課題と歩み ―

先ず、この科目の成立とその流れを概観するために関係する主な通達や答申、報告及び指導要領を年代順に上げてみよう。

・昭二二・七・七 「新制高等学校の教科課程に関する

件」(通達)(昭二三実施)

・昭二六・一・四 道徳教育振興に関する答申——教育課程審議会

・昭二六・七・一 改訂「学習指導要領一般編(試案)」(昭二六実施)

・昭二八・八・八 社会科の改善、特に道徳教育、地理、歴史教育について——教育課程審議会

・昭二九・一・一八 教育課程の改善、特に高等学校の教育課程について(第一次答申)(第二次答申昭三〇・六・二六)——教育課程審議会

・昭三〇・一二・五 改訂「高等学校学習指導要領」(昭三一実施)

・三五・三・三一 高等学校教育課程の改善について——教育課程審議会

・昭三五・一〇・一五 改訂「高等学校学習指導要領」(昭三八実施)《「倫理・社会」社会科必修科目として誕生》

・昭四一・一〇・三一 後期中等教育の拡充整備について(期待される人間像)——中央教育審議会

・昭四四・九・三〇 高等学校教育の改善について——教育課程審議会

・昭四五・一〇・一五 改訂「高等学校学習指導要領」(昭四八実施)《「倫理・社会」内容の集約化と日本思想の重視》

・昭四六・六・一一 今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について——中央教育審議会

・昭五〇・一〇・一八 教育課程の基準の改善に関する基本方向について(中間まとめ)——教育課程審議会

・小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について——教育課程審議会

・昭五三・八・三〇 改訂「高等学校学習指導要領」(昭五七実施)《総合的な社会科科目「現代社会」が新たに設けられ、「倫理・社会」は必修科目から選択科目「倫理」となる。》

『倫理・社会』の部分的內容が最初に高校社会科に現われたのは、昭和三一年度実施の必修『社会』の中においてであり、それまで世界史等で扱われていた思想家と思想内容を單元として設けられたことに始まる。それが三五年度改訂学習指導要領から、いわば突然の形で独立した社会科新必修科目「倫理・社会」として出現する。この事は、社会的な共通の理解を得ないこと、科目の本質が明確でないこととあいまって教育現場に不安に通ずる疑念と不信を生じしめた。

三五年度「改訂の基本方針」(解説総則編)の中に、この社会科新科目のねらいが記されている。「道徳教育は、教育活動のすべてを通じて行なうものとし、これをいっそう充実させるため、社会科の一科目として『倫理・

社会^①をおくとともに特別教育活動その他における生徒指導をいっそう充実した」とあり、これは小学校・中学校で昭和三五年より特設実施されている教科^②外の「道徳」との一貫性を持たせるためであるという。いわば「倫理・社会」は高校における道徳教育との関連に於いて生まれた科目である。

さて、この道徳教育が、このような形で現われてきた背景と動機また真の目的は何であったのかそれを証する十分な資料はない——道徳教育の内容を知る上で極めて大切であるが——。また、何故社会科の中にこの問題が関係づけられていったのか充分に明らかではない。ただ昭二八年教育審議答申「社会科の改善、特に道徳教育、地理、歴史教育について」の中で、前の答申の立場である「道徳教育は学校教育全体の責任である」と述べつつ「社会科が道徳教育に対して責任をもつべき主要な面を明確に考え、道徳教育に確実に寄与するようにその指導計画及び指導法に改善を加えることは重要である」として社会科における道徳教育の役割を述べているのは注目されることで、その後の社会科改訂の歴史に大きな影響を与えていったように思われる。これは昭和二六年「道徳教育振興に関する答申」の中での道徳教育問題の取り上げ方と異なっている。ここでは「終戦後の成人の社会からの好ましくない影響もあり、一部の児童生徒の間には、著しい道徳の低下が現われている」として、道徳教

育の充実が強調されている。しかし、この答申では「道徳教育を主体とする教科あるいは科目を設けることは望ましくない」それは「やゝもすると過去の修身に類したものになりがちであるのみならず、過去の教育の弊に陥る糸口ともなる恐れがある」として「学校生活全体にわたって不断に道徳的指導」が必要であると主張されている。昭二六年と二八年の答申の間に、何故このような考え方の変化が生まれたのであろうか。多々検討すべき事がある。ともあれ、昭和二八年以後道徳教育の問題は、小中高とわず教育課程編成の中心的なねらいとなっていたように思われる。例えば、三一年科目「社会」に倫理的分野が加えられたのも「道徳教育における社会科の使命は、社会科全体でなってきた事はもとよりであるが、そのほかに特に『社会』のうちにいわゆる倫理的領域をおくことによって、その集約的な達成を図ろうとした」（解説社会編）とあるように必修「社会」もそのねらいから改訂された。しかし、「社会」は、政治・経済・社会・倫理の順で四單元からなり「そのうちの前三者は主として客観的な科学的な内容として現場に受けとめられ、これに対してどちらかといえば、主体的自己反省的なものが強く要求される倫理とは結びつかなかった」ために履習されることが少なかった。そこで「倫理・社会」を独立させるに至ったと云われる。

三五年「倫理・社会」は、このような状況の中で生ま

れた。小・中学校の全学年を通して一貫した『道徳』の時間による道徳教育をそのまゝの形で延長するのではなく高校の段階にふさわしい道徳教育的役割分担を『倫理・社会』に担わせることが一つの欠く事のできない課題とされた。「青少年非行の増加、社会生活における道徳の混乱などの事情を反映して、道徳教育を充実して民主的道徳を確立するためのいっその努力を学校教育に期待する声もしだいに高まってきている」ことから道徳教育を一層充実強化するための一助として、社会科の一日目として『倫理・社会』を設置したとあり、これは三十五年度高等学校指導要領改訂の根幹をなす重要な基本方針でもあった。このことから、教育現場では、当時この科目としての『倫理・社会』はかつての前近代的道徳教育「修身」の復活につながるものとして受けとめられ、教科説明会は大きな混乱があり、怒号と批判の中で強行された事を記憶している人も多いと思う。

三、『倫理・社会』の性格と位置付けをめぐって―― 学習内容及び目標の変化――

当初の混乱や思惑はどうあれ、三十五年度『倫理・社会』は、発表された指導要領の「目標」及び「内容」でみる限り、それ程不安を与える復古的前近代的なものではなく、むしろ、これまでの科目にない新鮮な内容を持ったものであった。

目標の(1)「人間尊重の精神に基づいて、人間や社会のあり方について思索させ自主的な人格の確立をめざし、民主的で平和な国家や社会の形式者としての資質を養う」とあり、これは、教育基本法第一条の「教育は、人格の完成をめざし平和的な国家及び社会の形成者として」の理念をそのまま掲げており、社会科全体の目標より格調高い大目標を掲げている。(2)は「人間の心理や行動を社会や文化との関連において理解させるとともに、青年期における身近な問題を通して、人間としての自覚を深める」とあり、単に人間存在について考えるのではなく「人間存在の基本構造」を先ず人間の心理や行動のしくみと社会や文化との関連の中で理解させ、そこから人間としての自覚を深めていくという合理的科学的思考を養うことを目的としている。(3)は「人生観・世界観の確立に資するために先哲の人間や社会に対する基本的な考え方を理解させ」それによって更に「みずからの問題と結びつけて考察する能力と態度を養う」として「考える」というところに重点が置かれているのが特色である。(4)では「現代社会について科学的・合理的に理解させるとともに、そこにおける人間関係を考えさせ」とあり、単なる観念的な人間観によるのではなく現代社会に対応した人間関係を考えさせることを目的としている。

以上のように、目標からみる限り、この『倫理・社会』は、これまでの道徳教育という言葉のもつイメージとは

異なる斬新さが窺える。内容も目標をうけて、心理的分野と社会的分野を繋ぐ要め部分としての倫理的分野から成り、古い概念での道徳教育という受けとめ方をして最初に担当した年輩の先生達には「どうしようもない、どうやってよいか全く分らない、好きな部分だけ適当にやった」科目である。

内容の(1)「人間性の理解」として、人間存在について考えさせるために、人間と生活や行動様式としての文化との関わりを扱う「人間と文化」、人格の発達を社会的、心理的観点から考えさせる「人間形成の条件」、自我の発達と人生における青年期の意義を考える「青年期の問題」を学習させ、人生観、世界観への関心を深めさせる内容となっている。(2)「人生観・世界観」では、「西洋の考え方」「東洋の考え方」「日本の考え方」「現代の思想」を内容として自主的、批判的な思考力を養うとしている。(3)「現代社会と人間関係」として、社会集団の構造と機能、現代社会の特質と文化を扱う「現代社会と文化」と「社会集団における人間関係」「民主社会と民主主義の倫理」がその内容である。

以上の目標及び内容からしても新しい科目『倫理・社会』は格調の高い開かれた明るい印象を与えるもので、この新科目を十分に生かすところ、平板化した高校教育、記憶重視の社会科科目に新しさを持ち込むものであったと考えられるのである。成立の意図はどうあれ、担

当した最初の感じはそのようなものであった。しかし、現場での科目担当者への指導はどうであったか。昭和三十六年『解説社会編』には、もう一つ別の具体的なこの科目の性格が記されている。それは、小・中学校の教科外「道徳」との関連である。高校『倫理・社会』は、高校における道徳教育の一翼を担うものとして他の社会科目とは異なる面を持つことを強調し、中学校「道徳」目標と本質的に同趣旨でなければならぬとして、その内容が上げられている。その第一項が「日常生活の基本的行動様式をよく理解しこれを習慣づけるとともに、時と所に応じ、適切な言語、動作ができる」ことである。これは「生徒の具体的な生活」行動をもとに、「社会的な面からの要求」「道徳の問題」を考えさせる立場である。この項目はそれなりの意味を持つことは当然であるが、この立場を直線的に、社会科科目『倫理・社会』に連結させることには、大きな短絡的飛躍があった。しかし、現場での説明会等では、むしろ『倫理・社会』の教科外における特別教育活動との関連が特に強調され指導された。「ホーム・ルームの計画には、倫理担当者が入ることが望ましい」「生徒指導との関連強化」がそれであり、現に、倫理担当者は生徒指導担当と考えられた時さえある。ここに『倫理・社会』の科目としての不明瞭性がある。ここになり、現場の受け止め方にも影響を与えた。『倫理・社会』が充分内容の深さと新鮮さを持ちながら、結

果的に科目としての確固たる基礎を築けなかったのは、この点にあったように思われる。多くの県内研究会でも科目としての『倫理・社会』を重視する立場（哲学関係専攻担当者）と教科外との関連での道德教育的立場を主張するものと二つに分かれた。しかし、次第に全国的規模の研究会では、教科外の立場を重視する発表は少なくなり、倫社専門担当者の増加と共に、科目としての『倫理・社会』への取り組みが定着していった。

ただ、その中でこれと並行して文部省主催の研修会等から、特に日本の思想や日本人の考え方を強調する動きが現われるようになり次の改訂に影響を与えて行くことになる。

ともあれ、研究会では『倫理・社会』の内容をどのようにに理解させ、また考える力を養わせるためにはどのような内容構成がよいかという問題に移り、系統学習、テーマ別学習作文による指導など本格的な教科研究が着実に進展し各地に研究会も生まれる。

しかしこの事は、科目設置者の考え方からすると『倫理・社会』は「具体的な目標としての道德教育的性格」と同時に「学問的なものに目を開かせる」の二つの目標を担わされていたのに、次第に現場ではいわゆる「道德教育的性格が希薄」になって行ったのである。昭和四五年改訂の理由はここから生まれる。この四五年改訂の意図と方向を考える時、もう一つ見落すことのできない

資料がある。昭和四一年中教審答申の「後期中等教育の拡充整備について——期待される人間像——」である。道德教育に別の色彩があらわれ、以後の教育課程の変遷に大きく影響を与えたと思われるからである。「日本人にとくに期待されるも」等々当時話題を呼んだ答申である。四五年以後の『倫理・社会』はこの影響を受け教科書内容にも変化がみられる。さて、『倫理・社会』は定着するに従って道德教育的性格が希薄になったという事で、教育課程審議会では、この科目を以前の形に戻すべきとする意見と「更に思い切って、社会科から独立させ、別の教科とし……道德教育にあたらせるべきだ」とする意見と強く出たと云われる。四五年改訂『倫理・社会』は、この観点から内容と方向に変更が加えられる。説明では、従来欠けていた道德教育的性格を織り込むために思想学習になり過ぎないように、目標(1)を、「自主的な人格の確立をめざし民主的で平和的な国家や社会形成者としての資質を養う」から「倫理的価値に関する理解力や判断を養い」とし「自主的な人格の形成に努める態度を養う」とすることによって道德的面を強調したとして、目標(4)を比較しても「倫理的」という言葉が多くなり「倫理実践」が強調されているのが特色である。また、四五年改訂による内容の変化も顕著であり、特に人生観・世界観ではこれまでの思想内容を大きく集約し、日本の思想の領域を増大させているのが特徴である。教

科書内容も大きく変化がみられるようになった。その意味で、これまでの教科外的な立場に立った道徳教育ではなく、思想の上での道徳教育、国民道徳の立場からの新しい型の道徳教育の方向づけがなされていた。

ところで、四五年度改訂後間もなく必修科目『倫理・社会』は別の予想しなかった新しい状態におかれた。大学入試改革により、共通一次受験科目として有利な科目とされ、それと共に学習内容の充実と教科的論理性が要求されるに至った事である。これは、『倫理・社会』が科目としての基礎と性格を持ちうるか否かに関わるものであり、受験科目の持つ弊害は別として、科目としての確実な一歩を踏み出す上で意味を持つものであった。と同時に他社会科目と同じく、教材の取り扱い方、指導法等も多くの研究と蓄積がなされていた。しかし、この現場の状況とは別に『倫理・社会』は廃止の方向で検討されていた。それは、いわゆる道徳教育の使命を充分果し得ないと判断されたからである。

四、『倫理・社会』の現在の意味と未来

ここで、『倫理・社会』は現場でどのような科目として意味づけられていったか述べてみたい。設置の目的はともあれ、科目の定着化と共に実質的なねらいは、知識の集約伝達という硬直化した高校教育の中で唯一の思索的科目として方向づけられようとしていた。多彩な思想の

流れの中で、自由な思想的発想が人類社会にどのように影響を与え現実化されて来たかを理解させ人間や現実を多角的に自由に見つめる力を身につけさせる事に方向づけられつつあった。そのためには、倫理的領域のみの理解ではなく事実に対応する為の科学的見方や知識を基礎に考える力を養うことである。考えるに、現在、高校教育の中で最も必要なことは、人間を中心にすえながら人間や社会とその未来や自然を全教科的巨視的な観点からいわばグローバルに思索する学習科目を育て上げる事である。既成知識の伝達のみでなく人間や社会についての自由な発想と広い観点からの思案そして人間の真実や真理への好奇心と探究心、人間への限らない関心を育てる事こそ高校教育の中で、人間関係の在り方を考えさせる大切なものである。ある意味で、社会や文化、心のしくみと発達、人生観世界観など多面的な内容を持った『倫理・社会』の育成こそこの可能性を持っていたと私は思っている。

さて、五三年改訂では、倫社担当者増加等の行政的配置もあると云われているが、選択科目『倫理』として一応存続された。しかし、内容は倫理的領域のみと大きく改訂され五七年度より実施されているが、現場の実情は冷やかであり、『倫理・社会』に対するような好奇心も期待感もない。内容的に将来科目としての力量を充分持ちうるか予測は難しい。現在『倫理』を選択しようとし

ている高校は極めて少いのは、この辺の事情を示していると思われる。

（青森県立浪岡高校 教諭）